

草庵仏教

第118号
(発行日)
2000年4月1日
(発行所)
真宗大谷派 念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人)
土井紀明

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋仏壇店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

現実を受け入れる

先日、父方の叔父が八十一才で亡くなり、葬儀に参列しました。その帰路、従兄弟のSさんの家に寄りました。

Sさんは四年ほど前に、横道から飛び出してきた車に衝突され、乗っていた車ごと畑に横転するという大きな事故で首から下に大きな障害が残り、杖をつけて歩くこともやつとという状態になってしまったのです。リハビリを続けていますが、これ以上機能が回復することは容易ではなさそうです。一日の大半は横臥を余儀なくされています。そんな不自由な身体の中から何とか生き甲斐を見出そうといういろいろ工夫しておられます。

Sさんと病気の話とか子供の話などをしている中で、Sさんが「現実を受け入れるしかない」とポツツと語られた言葉がずしりと重く私の耳に響いてきました。

事故後のしばらくの間は心身共に大打撃を受けられたと過します。それから何年か経過し、今ではだいぶ落ちついてこられたなかで「現実を受け入れるしかない」という言葉ですから重みがあります。

以下、「現実を受け入れる」とはどういうことであり、どうしたら受け入れることが出来るのかを考えてみたいと思います。

では逆に、「現実を受け入れられない」ということはどういうことでしょうか。

たとえば、身体の半分がマヒしている状態から何とかしたいと思つて、「どうかならないものか」「なんとかならないものか」「どうしてこんな体になつたのか」「なにも悪いことをしてないのに、なぜこんな目にあわねばならないのか」などと、嘆きや悲しみや、時には怒つたり、落ち込んだり、あせつたり、後悔の念でいっぱいになったりします。そういう状態が「現実を受け入れられない」というのでしょう。そこに苦しみ悩みというものがあります。

逃れることの出来ないような災難や困難にぶつかつて、それらを「受け入れることができない」とのが苦悩であり嘆きであるといえます。

どういう不幸・災難がふりかかつてきても「それもよし」「これも結構」と、それらをスツと引き受けられるならば、その人は賢者であり聖者でしょう。

江戸から明治にかけて出た剣の達人であり禅の悟りを開いた人と言われた山岡鉄舟が、重い病氣になつて余命いくばくもなくなくなつた時、友人たちが見舞いに行こうといふことになり行きたがらないのです。相手は並の人物ではありません。

下手な見舞いをするわけにいかないのです。それで困つてしまひました。そこでどうしよう勝海舟に頼んだところ、「それじゃあオレが行こう」ということになつて、海舟が鉄舟の見舞いに行きました。海舟が病室に入ると、鉄舟が「お先失礼する」と今生の別れをつげました。そうしたら、海舟が「お前うまいことやつたな」といつて、それで見舞いの挨拶がすんだということでした。

なお山岡鉄舟は、最後は座禅しながら亡くなつたといわれています。

こういう胆力のすわつた達人たちのマネはとても私たちに出来るものではありません。己の死ぬことさえ軽やかに受け止めるような賢者や傑物のようには私たちはとてもいきません。

半身がマヒして治らなくなると、自分の不幸を嘆いたり後悔したり、イラだつて人を責めたり、うらんだりしてしまひます。「現実を受容しなればいけない」と頭ではわかつていても、ついつい「どうしてこんな体になつてしまつたのか」とグチがしきりに出ます。「いっそ死んでしまつたほうがいいかな」という絶望的な気分にもなります。今のどうにもならない体を「これも理想で受け取ることは出来ない気持ちはとてもなれませんが、いやちよつとの間はこれ結構」というような思いになることがあるかもしれな

い、しかしすぐあとから「どうして私だけこんな目にあわねばならんのか。友達はみんな自由に旅行にいたりスポーツをしたりと楽しそうにしてるのに」と、いやおうなくグチが出てきます。グチつてもどうにもならないことなのに悔やまれてきます。

以前読んだ宮城智定師の「大地の感覚」という本の中に、長く聞法されていたある老女の言葉が出てきました。

彼女が時々「この身に受けとれない苦しみはない」といわれていたとのことでした。これは、いろいろな苦難にあいつつ、仏法を聞いていかれた中から出てきた智慧であろうと思ひます。

たとえば半身不随になつても、我が「身」は半身不随の身をちやんと受け取つています。逃げも隠れもせず、与えられた半身不随という現実を「身」は生きています。現実在刻々と半身不随の現実をこまかしく生きています。イヤもオウもない。刻々と半身不随の身そのものを生きていくのです。

実際、この事は人間だけにかぎりません。他の動物もこの点は同じです。犬でも猫で



elderberry

も、病気の時は病気の身をそのまま生きているのです。老化した時は老いぼれの身を黙って生きています。

ただ問題は私たちの心い**ば**思**い**です。身体そのものは、半身不随の事実を黙って引き受けていますが、私の思いはいつまでも「どうしてこんな体になつてしまったのか」とか「こんな体になつてしまつて、この先私はどう生きていいのか」とか「他の人は自由に飛び回っているのに自分**は**な**さ**けない」とか、そういう「思い」が起つてきます。

人間と動物の大きな違いはこの点にあるようです。「あの時にもっと注意しておけば良かった」と過去を悔やみ、「これから先どうしたらいいの**か**」という未来に不安を持ち、「あの人のせいだこうなつた」とうらみ心が起り、「友達は遊び回っているのに自分**は**ほとんど動けない」というように他と比較したりしています。そういう「想念」、これが結構自分自身を苦しめたり悲しませたり嘆かせたりします。

ただ人間は、半身不随なら半身不随の事実そのものになつて、事実そのものと一枚となつて、身の事実のままに

生きることが、容易に出来ないのです。我が身の現実を認めず、受け入れず、「どうしてこんなことになつたのか」と身の事実を反抗し、抵抗し、拒絶して、生きようとします。けれども、半身不随の身の**事**実は、どれほど「我が思いが抵抗し拒絶しても」、付いてまわります。今の我が身の現実から逃れることは出来ないのです。それこそ「思い通りなら**な**い」現実こそが、今この私の現実です。

では、どうにもならぬ現実をどう受け止めていけばよいのでしようか。それについて佐々木蓮鷹師の法味寸言に「**本**当に在るものは、**今**のこの**自**分の**み**、その他はすべて空想」

とありますが、本当の現実は今・ここ・生きている**事**実があるのみです。しかも、「どうかんがりたいけどなれない」という私の思いは行きづまっても、今ここに生きている**事**実そのものは行きづまりません。寸言に

「古往今来行きつまりなし。行きつまりは、人間の心がつくるのみ」とあります。アリノママの今この**事**実には行きづまりはなく、ただ「どうにもならぬ」という私の思いが行きづまっているのみです。ですから寸言では

「いかに行きつまったと言つても、明日は必ず来る。心配して寝ても、安心して寝ても、必ず明日の日は来る」と言われるのです。心は行き

づまるけれども、事実そのものは刻々と流れて止まないので**す**。「あなればいいのに、この願望に**関**係なく、現実そのものは移り変わつていくので**す**。寸言に

「願わざれども月は昇り、願えども月は沈む」と言われています。現実**は**「私の思いでどうにもならぬまま、どうにかなつていく」のです。この点について、**私**の思いは行きづまつても**事**実そのものは行きづまらないといつても、私は**つ**いには死ぬ**で**はない**か**」という疑問が湧きます

が、**実**は死ぬ時は「私は死ぬ」という思いぐるみ無くなつてしま**い**ます。すなわち「行きづまる思い」そのものが無くなり**ま**す。

いったん「思いと**事**実」の大きな違いに気づかされると、それ以前よりは楽に生きられると思**い**ます。それは確かに現実を受容していく一つの道になります。

けれども、現実に対する受容を、もつと有り難く、もつと豊かに、もつと積極的**に**、可能ならしめてくださる道が**あ**ります。それが「本願を信じ念仏を申す」というお念仏の道**で**あります。

それは「どうにもならない」我が身の**現**実に注いでくださる仏の大慈大悲を仰いで生き**る**道**で**す。

阿弥陀仏が「汝、我が国に生まれるとおもうて、念仏申せ。かならず浄土に生まれさ

せる。タスケル」と私の上に誓**い**ます。阿弥陀仏の「まごころ」にふれ、阿弥陀仏の「我に汝の今のま**ま**をまかせよ」の仰せのままに、今のど**う**にもならない現実そのものを阿弥陀仏の大慈にゆだねていく道**で**あります。

行きづまりのその都度、「我が名を称えよ」との大悲の**み**こころのままにお念仏を申していく道**で**あります。

如来大悲のお導きに人生をおまかせし、お計らいに運ばれていくのです。

念仏申すままが「どうかながく手を切つて下さり、今この現実そのものに帰らせて下さるのです。ナムアミダブツ、ナムアミダブツと念仏している**ま**まが、はからずも今この現実そのものに生きて**い**ることになるのです。現実を受容して**い**ることになつて**い**るのです。「どうにもならぬ」まま、阿弥陀仏の**み**手に抱かれ、阿弥陀仏のお働**き**に運ばれ、導かれ、浄土へと生まれしめられるのです。

(了)

真宗聖典講座

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなどということ、不可説なり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわれば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

〈歎異鈔第六章第三講〉

（現代語訳——一緒に連れそうべき縁があれば連れとなり、離れねばならない縁にもよおされたならば離れていくこともありすもの、「師に背いて、他の人に従って念仏するようなもの、浄土に往生することとはできない」などということは言語道断です。阿弥陀仏からたまわった信心を、自分が与えたもののように、取りかえそうとでもいうのでしょうか。そんなことは決してあつてはならないことです。しかし、よくよく教えを聞き、本願他力の道理にしたがつていくならば、おのずと、阿弥陀仏のご恩も知り、また本願をたのめと教えてくれた師の恩をも知るようになるはずで、と仰せられました。）

「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのある」という言葉から人間関係が本来どういふものであるかが示されている。

親子関係についていえば、親となり子となるのは、共に生活するの深い縁があつて親子になつて、共に生活するのであるし、離れる縁がくれば、親子が別々に住んだり、あるいは死別することにもなる。我が子といえども、私がつくったものでもなければ、我が所有物でもない。よほどの深い縁で親子の交わりをするようになったのである。だから親子になつても、生まれてすぐに親に死に別れたり、子に死

に別れたりすることがある。縁によつては長い間共に生活する場合もあり、一方親の離婚などの縁によつて親子で生活する期間が短い場合もある。夫婦の場合は縁によつて結ばれていることがより一層明かである。結婚話のことを縁談ともいい、夫婦別れをすることを縁切ともいうが、そういう言い方の上にも表れている。

縁によつて人と人とは出会い、共に生活し、運命を共にしたりする。そういう深い縁をもつた結びつきが親子・夫婦の関係の中にある。そういう縁の深さを宿縁というのである。宿は「むかし」ということである。かりそめの縁で親子・夫婦になつたのではない、生まれる前からの過去の久しい縁によつてである。これは科学的にどうこうというのではなく、感じられるものであろう。

昔の知人で、インドがすこぶる好きな人がいた。若い時インドに行きたくて、学校の先生をしていたのであるが、先生をあつさり辞めてインドにわたり、四年間も滞在した。ある時インドのマドラスで病気になる、あるインド人の家で世話になつた。その時看病してくれたインド女性と親しくなつて結婚することになつた。その時彼女が「あなたと私は前世でもきつと夫婦だつた」とまじめに彼に語つたことを、彼から直接聞いたことがある。

もともと宿世の縁という思想感情はインドから伝わつてきたのであるが、インド人としての彼女の感性が夫婦としての宿縁の深さを感じたのであろう。それは、私たち日本人も「宿世の因縁」という言葉で伝統してきたものである。「袖すりあうも多生の縁」という。多生とは生まれ変わり死に変わつて来た多くの生存（多生）ということ、多くの生存の中で縁があつた上ではじめてこの世で袖すりあうという小さな縁がもたらされるのである。この世での小さな縁も、長い過去の因縁あつたことと意味である。であれば親子・夫婦となつた因縁の深さは推して知るべしということである。う思えば親子・夫婦となつた関係を粗末にしてはならないという思いも湧いてくるというものである。

師弟の関係も、縁によつて師ともなり弟子ともなる。弟子は師に隷属するものではなく、ただ縁によつて師となり弟子となつたのであるから、離れる縁がくれば別れていくのである。そういう因縁の道理を無視して、師弟の関係を固定的拘束的に考え、弟

子を自分のところに縛り付けようとするのは、己の名誉心や財欲の煩惱でしかない。

親鸞聖人の御門弟は関東の各地で門徒グループのリーダーとして、門徒集団を形成していたが、そういうリーダーの中で、自分のグループから離れようとする平門徒を脅かしたり、非難したり、自らの集団から離れさせまいとして、「他者の弟子になると救われぬ」といふものがある。

これに似たことは今日でも、大なり小なり、グループや組織の中で起こるのである。その問題の根にあるのがリーダーたちの自我心であり、具体的には「名声と経済的なものへの欲望」である。自からのグループを離れる人によつて、自分が「侮辱された」「軽んじられた」といふ煩惱を起すのである。それはまさに我愛と驕慢のわざにはかならない。

しかも自分の元を離れていく人が一人でも出ることは収入にも関係してくるから、なおさら離れる人が出ることをおそれ、離れようとする人を非難したり、またこの場合は教えまでゆがめてしまつて「他の師の処に移つたら救われぬ」といふようなとんでもないことを言つたりもするようになるのである。

実際、現代でも、さまざま宗教において信者の獲得や保持のために、脅しにも等しいようなことを言つて、いったん入つた信者をのがすまいとする行為が行われていることを聞く。「私たちが離れると地獄に墮ちる」とも言いかねないのである。

そういう言動の中にすでに、大きな名利心（名誉欲・財欲）が潜んでいる。仏教では、財欲・色欲・飲食欲・名誉欲・睡眠欲を代表的な欲望とする。

ともかく、共に弥陀・釈迦の弟子でありつつ、聞法念仏する人は共に御同朋、御同行である。

たとえお互いの中で念仏聞法の組織を作つたとしても「来るものはこぼまず、去る者はおわず」といふ言葉通り、出入り自由なのが仏教本来の僧伽（集まり）のすがたである。

（了）

暁烏教師の言葉

「私らのこの仏を信じる心は、私がこしらえたのではない。仏の眞実信心が私に至り届いて下さるのである。信心を得るといふことは、私の胸に信心が起きることである。〈至る〉というのは、仏さんの心が至り届いて下さるのである。その心を聖人は、至心に回向したまえり」と読まれたのである。信ずる心を我々に下さるといふのである。

自分の力で信じたのではない。信じさせて下さるのである。あなたのお心がここに至って下さったのである。聞こえたのである。其の名号を聞いて信心歓喜し乃至一念せん。至心に回向したまえり。ただ聞こえるのである。その名号が聞こえる時に仏の心が私に至り届いて下さるのである。それが他力である。だから、おおきに所聞を慶喜せん」と仰っしゃるのである。』

『和讃講話』上

今回の名師の言葉は今年の一月号にご紹介しました暁烏教師の言葉です。この言葉は師が親鸞聖人の御和讃の「十方諸有の衆生は 阿弥陀至徳の御名を聞き 眞実信心いたりなば おおきに所聞を慶喜せん」といって講話されたものの一節だと思えますが、林暁宇師のところから発行されている「鳥越だより」第三号の巻頭に掲載されていました。眞実信心が佛心の回向であることを強調されたものです。

以下私の聞思したところを述べます。

「私らのこの仏を信じる心は、私がこしらえたのではない。」眞宗の信心はなるほど私の心に起こるのであるが、私の凡心から起こるのではない。私の心の中から起こるなら、その心は私の心の一部であって私の心の全体を救えない。私の心に成就するのであるが、私の心に与えられて離れないものとなつてくださる仏心のほかに信心はない。蓮如上人も御文に「仏智より他力の信心をあたえたまうがゆえに、仏心と凡心とひとつなるところをさして、信心獲得の

行者とはいふなり。」と申されている。昔、読んだ本の中に、信心深い著者のお母さんがよく歌っていた信心の歌が紹介されていた。それは「極楽の至心の鳥が飛んできて、私の胸に巢をかけて、

南無阿弥陀仏と鳴いている。
我称え 我聞くなれど 南無阿弥陀
連れてゆくぞの 弥陀の喚び声」

とありました。まことに阿弥陀仏の至心のまごころが常に喚んでくださる、その喚び声が私の処(心)に届いて聞こえてくるほかに信心はない。信心の内容は名号であります。

「ただ聞こえるのである。その名号が聞こえる時に仏の心が私に至り届いて下さるのである。それが他力である。」

名号が聞こえる、これは聞く心をたまわって初めて聞こえるのである。凡夫の心には本願を信じる心はない。信じたようでも、心の底に疑いがある。だから信じたと思つていても、少し揺さぶられると、疑い心が出てきて、信心が怪しくなったり壊れたりする。

弥陀の本願は不可思議の願である。こんな不思議なことは凡夫の心で信じられるはずもないのである。本願を信じられると思うが、信じる力は私にはないのである。私の心の底に疑う心がある。私の心で本願が信じられようはずがない。

私たちは阿弥陀仏の本願を信じることが出来るように思っているが、それがそもそもまだ私の心を信頼しているのである。

全く無信の者、それが私である。まことにチリばかりも出離の縁あること無き身である。

この出離の縁無き者をこそ「助けん」と思ひ召したちける弥陀の本願である。タスケル弥陀の本願も弥陀の御力であるが、その阿弥陀仏の本願を信じる心も阿弥陀仏よりたまわるのである。乗せる船もあなたのお力なら、その船に乗る力もあなたより与えられるのである。まるまるの他力である。「信ずる心を我々に下さるといふのである」。弥陀の本願も不思議なれば、それを信じる心も不思議である。どちらも仏智不思議から与えられるものである。

「自分の力で信じたのではない。信じさせて下さるのだ。あなたのお心がここに至って下さったのである。聞こえたのである。」

あなたのみごころ(至心)は、私たちの無明・煩惱を浄化するために、長い御修行、六波羅蜜の行、五念門の行を、私を救わんがために、なして下されたのである。如来は無明・悪業のかたまりである私たちを助けんがために

「初めていまだかつて貪・瞋および痴・欲・害・悲の想を起さず。色・声・香・味・触の想を起さず」(無量寿如来会)

に仕上げた下さった南無阿弥陀仏である。だれのための南無阿弥陀仏であるか。貪瞋煩惱の私、色・声・香・味・触への執着をたえず起こしている私たちのために、難行苦行をなしたもうてできあがった南無阿弥陀仏である。

「我が名を称えよ」と喚びかけてくださるのは、そのような行を準備万端整えた上での喚び声である。「我をたのめ」であり「我が名を称えよ」の喚び声である。この一語の上に無窮のみごころが表されている。このまごころを仰ぐところに、「仏の心が私に至り届いて下さるのである。」

私が学んだことや、聞いたことや、信じたことによつて助かるのではない。阿弥陀仏の「汝を助ける」と仰せられる力によつて助かるのである。我が身の助かる理由は全く弥陀の側にある。(了)

はこばまず、去る者はおわず」という言葉通り、出入り自由なのが仏教本来の僧伽（集まり）のすがたである。（了）